

「安倍」なるもの

標題は朝日新聞 10 月 4 日朝刊「2017 衆院選」。リードから一政治家の名門に生まれた安倍晋三首相。在職日数は第 1 次政権と合わせ 2 千日を超え、戦後 3 番目の長さになる。その政治センスをどう見るか。「安倍的政治」とは何だろうか。

今回の大義なき衆院選の最大の争点は、長期にわたる自公政権、とりわけ安倍首相の政治を問うことにある。どうも「小池的」なるものに関心が集まりがちだが、「劇場型」政治に惑わされてはいけぬ。安倍一強と言われるなかで、驕りと隠蔽、強権的な政治に批判が集まってきた。「もりかけ問題」にみられるように、安倍首相と妻が直接かかわる疑惑に、国民の多くが不信・不満を抱いている。

「安倍」なるものを 3 人の論者が語るが、なんと言ってもジャーナリスト青木理さんの発言が鋭い。7 月 4 日にレポートしたように、青木さんは『安倍三代』を出版して、安倍晋三の実像に迫る。そのエッセンスを発言から紹介したい。



長期政権を築き、戦後日本の「かたち」を変えようとしている首相「安倍晋三」とは何者なのか。父方の祖父で戦前、戦中の衆議院議員、安倍寛、そして父である元外相、晋太郎の周辺を地元、山口県で徹底して取材しました。

寛は、1942 年の選挙で大政翼賛会の推薦を得ず当選しました。古老たちは、寛が東条英樹内閣の方針に反対し反戦を貫いたと証言しています。だが、彼は終戦翌年に病気で亡くなりました。

安倍首相は生前の寛に会ったこともなく、今何かを語ることはほとんどない。元首相で母方の祖父、岸信介のことは、誇らしげに口にします。岸は幼い頃の安倍首相を大変可愛がり、週末は箱根の旅館で一緒に過ごしたそうです。

安倍首相は、東京の私立成蹊学園に小学校から大学まで在籍しました。学友や恩師、神戸製鋼社員時代の上司らに話を聞くと、みな「彼が政治的なことを語ったのを聞いたことがない」「いい子だったが、あまり印象に残っていない」と口をそろえるのでした。

おそらく安倍首相には、もともと強固な右派思想などなかった。根本にあるのは岸信介への憧れと敬愛、そして岸を批判した左派への反発といった程度の感情でしょう。若いころを知る元上司は「子犬がオオカミの群れと交わり、オオカミになってしまった」と表現する。政界に入り右翼政治家やイデオログと付き合い、強い影響を受けたのでしょう。首相自身、それが時代の空気に合っているという打算があったかもしれない。

突き詰めれば、政治をなりわいとする名門一家の3代目として、立派な政治家をいかに演じるか。つまり安倍首相を形作った縦軸は、大きな志もなく家業を継いだ単なる世襲政治家。横軸には中国や韓国を敵視し、時に蔑視し、「強い日本」の復活を夢見る、社会の薄っぺらな風潮があり、相互に共鳴もしている。

斜めの軸があるとすれば、北朝鮮の存在でしょうか。特に日本人拉致問題で日本は戦後初めて朝鮮半島との関係において「被害者」になった。その拉致問題を熱心に取り上げ、政界の階段を駆け上がった。今回も「国難突破解散」と称して北朝鮮への対応を争点にしようとしています。

現在、衆議院議院の2割以上が世襲です。自民党や閣僚になると、さらに比率は上がる。老舗の和菓子屋や歌舞伎の世界とは異なり、政治は公のものです。3代目ともなれば地元の選挙区から離れ、東京で育つことも多い。安倍首相は世襲の究極系です。

代議制民主主義は、政治家が民意をくみとり、政治に反映させるもの。世襲ばかり増え政治を牛耳れば、民主主義をゆがめます。世襲議員の立候補に一定の制限を設けることを真剣に考えるべきでしょう。

(2017年10月7日)